

ジャグパル

JugPal

2003年4月1日 第19号



インタビュー

【伊藤佑介さん】

またまたとんでもなく素敵なお会いすることができました。

伊藤佑介さん

～ けん玉に人生の全てを捧げている23才の青年です。

ずばり彼の目標は、“けん玉のプロ”として生きていくこと。

私が彼を最初に見たのはブラウン管上でした。



昨年放映されたNHKの番組「首都圏ネットワーク」内の特集で、「夢をかなえるために:若者たちの挑戦」というタイトルで伊藤さんが取り上げられ、けん玉一つでプロを目指す彼のエネルギーに、単純にへえ～と驚嘆し、ある種の羨望を持って彼のことがしっかりと記憶されました。

今回たまたま3月のイベントでご一緒することになり、これはチャンス！と、イベント終了後インタビューをさせていただきました。

伊藤さんは、小学2年生の時にけん玉に出会い、小学3年生になると地元の「日野けん玉道場」に第一期生として入会し、競技としてのけん玉道を学び始めました。

それ以来けん玉にのめり込み、数々のタイトルを制し、平成13年には“もしかめ”の世界記録、7時間35分55秒を達成しギネス記録に認定されました。

(註)もしかめとは、中皿と大皿に交互に玉を乗せる動作を繰り返す技のことです。

また今年1月には、東京都主催・第2回ヘブンアーティスト審査に合格し、現在は大道芸が主な活動の一つになっています。

とにかくけん玉が好きで好きで、中学時代ラグビーのキャプテンを務めていた時も、けん玉の大会とラグビーの試合が重なればけん玉大会を選び、顧問から「おまえはけん玉一本で行け」とキャプテンの座を降ろされたり、けん玉というマイナーなものへの取り組みゆえの異性とのおちよと切ない体験等、様々なことがあったようですがそれでもけん玉をやめるなんてことは毛頭考えず、多い時には8時間、今でも3時間ほどは練習を続けているそうです。

大学に入ってから、児童館等で人に見せたり、教え始めたりして、今までの競技生活とは別の視点でけん玉を考えるようになりました。

つまりけん玉の娯楽性をもっと沢山の人が知ってもらい、けん玉ってこんなに楽しいものだ、人を魅了するようなパフォーマンスを志向するようになったのです。

やがて大学を卒業するにあたり、就職してもけん玉の活動がしやすい、例えば土日はずいぶん休めるような職業を探そうとしたのですが、それは自分自身を偽ることになると人生の一大決断をして、けん玉を職業とできるよう自らがパイオニアとなって一歩を踏み出しました。

と言ってもけん玉一つで十分な生活費をまかなえるはずもなく、アルバイトで収入を補っていますが、最近はヘブンアーティストとして路に立つことが多いとのこと。



伊藤さんは、「路上でやるのは本当に楽しい。今までは競技者として自分のためにやってきたけれど、老若男女問わずいろいろな人たちに観てもらえるし、その他のアーティストの方々から学ぶことも多く本当に楽しいです。」と仰るくらい、今現在大道芸に打ち込んでいます。

けん玉 = (イコール) 昔遊び、みたいなイメージがありますが、伊藤さんはけん玉はスポーツ性はもちろんのこと、エンターテインメント性もあり一生楽しめるものなので、もっともっと世の中に広まって欲しいと普及の面からも力を注いでいます。

またけん玉一筋という自分の姿を見てもいい、こんな奴もいるんだと知ってもらうことにより、何かに打ち込み極めることによる生きがいや誇りを伝えられたらと願っています。

さて話は冒頭の彼の目標に戻ります。

伊藤さんは“けん玉のプロ”を目指していると紹介しましたが、伊藤さんが考えるプロの条件が二つあります。

一つは感動を与えられるけん玉ができること。もう一つは生活費が稼げること。

ここで彼が言う“けん玉のプロ”とは、パフォーマーのみに限定しているわけではなく、演技者、競技者そして指導者全ての面におけるプロフェッショナルという意味だそうです。

ただ、こと表現者に限って言えば、私自身必ずしも二番目の生活費を稼ぐことが、表現者におけるプロの条件とは思えないのですが、これはあくまでも平成15年3月時点での彼の考えだと認識していますし、恐らくこれから幅広く活動していけば、今考えている「プロの条件」は変わってくると思います。

何年か経ってからまたこの件に関して彼とお話できればと楽しみにしています。

それにしても、もしかめを7時間35分55秒とは……。

前日から飲まず食わずで競技会に臨み、肉体面はもちろんのこと、その精神面でのタフさは常人の域を遥かに越えています。

もちろん途中でやめたい、特に既に優勝が決まっている時などはその誘惑が強いそうですが、それでも自分の挑戦がけん玉の普及・発展につながるという信念があるので続けられるそうです。

そのこだわりがあり続ける限り彼の競技者としてのもしかめへの挑戦は終わりそうもありません。

伊藤さんのパフォーマンスを拝見して、テクニカルな面では素人の私にとっては神業の連続で申し分ないのですが、演技としてはまだ競技者としての色合いが払拭し切れず、キャラクターが見えにくく娯楽性に関してはまだ改良の余地があるように見受けられます。

エンターテイナーとアスリートとをどう使い分けていくかが課題の一つでもあるように思えます。

けん玉パフォーマンスはまだまだ発展途上です。

伊藤さんはまだまだ若いのだから、これからはけん玉以外のパフォーマンスにも数多く接して、本をたくさん読んで、いろいろな人達とお付き合いして、とにかくどん欲に吸収して幅広く大きく成長してもらいたいとエールを送ります。

そうそうもう既にジャグリングにも興味を持ち、生のパフォーマンスやビデオなどを観て、けん玉の新しいトリックを創り出すために研究しているそうです。

そういった過程の中できっと娯楽性のある演技やキャラクタが生まれてくるでしょう。期待していますし、今後の活躍が本当に楽しみです。

今回は中年おじさんの説教の場と化してしまったインタビューでした。(伊藤さん、ごめんなさい)

伊藤佑介さんについてはご自身がサイトを開設されていて、今後のご予定なども分かります。

Webサイト<<http://home.att.ne.jp/banana/yusuke/>>

メールアドレス<itoyus@hotmail.com>

[安部保範 <chansuke@chansuke.net>]



書籍紹介

【世襲について - 芸術・芸能篇 - 】

書名:世襲について - 芸術・芸能篇 -

監修:竹内誠

出版:日本実業出版社

本体価格:2,000円

ISBN 4-534-03503-9



昔のジャグラーやサーカスアーティストの演技中の映像や写真を見て、古いと言えども「えっ、こんなこと演(や)ってたの!？」と、逆に新鮮さを感じ、こんな面白いトリックを今誰か(継承して)演っているのだろうか、と思ったことはありませんか。

家族主体のいわゆるファミリーサーカス、幼い頃から父の指導の元才能を開花させたアンソニーガットのようなジャグラー……西洋でも芸の継承は行われていると思います。

日本では能楽、狂言、歌舞伎、文楽等の伝統芸能に残っている芸の継承のための“世襲制”ですが、詳しくは分かりませんが太(大)神楽の分野においても無縁なことではないでしょう。

今回単純に“世襲”って何だ?と疑問を感じこの本を手にとったわけで、決して推薦しているわけではありません。

この本から、「世襲」とは伝統を継承しつつ、創造の中から新たな生命を芸に注ぎ込むための日本古来からの思考法のひとつであり、平たく言えば「システム」だということが分かります。

本を読んで世襲制に関して幾つか誤解していたことが分かりました。

具体的には、“芸を継ぐ者が家を継ぐ”(本書より)とあるように、本来世襲は必ずしも血統第一主義によるものではなく、実際には実力主義による継承の方が優先されていたのです。

例えば必ずしも嫡男とは限らず、次男三男でも、養子でも、あるいは弟子にでも継がせていました。

この行為は芸の継承、すなわち家の存続に等しかったわけです。

確かに「世襲」って、封建的だとか、才能が無くても名跡を継いだりすると思われ、一般的には評判は悪いでしょう。マスコミ等の歌舞伎役者や狂言師のスキャンダル報道から、何となく否定的な感想を持っている方も多いと思います。

でもこれは本来の世襲制による問題ではなく、血統主義が全面に出過ぎたがゆえの弊害なのです。(妾が許された昔と違って、一夫一婦制等、家制度が民主化され血統主義に走らざるを得ないと言う側面もあるのでしょうか。)

その他にもマイナス面ばかり強調されがちな世襲制のプラス面を見ることができ、本書は伝統芸能や世襲制を考える上では役に立つでしょう。

“世界中を見渡しても、日本ほど伝統芸能が整然とした形で受け継がれている国はない。”(本書より)

恐らく先人達は芸事を伝えるにはこうした制度が最良の方策として、長い時間をかけて作り上げたのですが、この制度自体も芸事と同様に新たな創造無くしては、時勢に取り残され消滅してしまう恐れがあります。

“ネオ伝統芸能”なんて言葉を聞く昨今ですが、これからの伝統芸能の行方は……

[安部保範 <chansuke@chansuke.net>]



書籍・ビデオ紹介

[Mime Spoken Here]

昨年12月13日、アメリカのバントマイム界を中心に多くのパフォーマーを指導し、ジャグリングの世界にも大きな影響を与えたトニー・モンタナロ Tony Montanaro 氏が、75 歳で亡くなりました。

バントマイム(またはマイム)と聞いて多くの人が連想する「壁」の表現を最初に考案し有名にしたのはモンタナロ氏であると聞けば、その影響力の大きさが実感できるのではないのでしょうか？(氏は、そのようなマイムに対する固定観念や偏ったイメージを嫌っていたそうですが)

モンタナロ氏は、「現代バントマイムの父」と呼ばれるフランスのエティエンヌ・ドクルー Etienne Decroux とその弟子でバントマイムの代名詞とさえ言えるマルセル・マルソー Marcel Marceau の両方に師事した上で独自のマイム表現を作り出し、アメリカに戻りマイム界の大きな柱となりました。

自身の公演活動だけでなく、プロ、アマチュアを問わず多くの人にバントマイムを教え、バントマイム以外の分野の人々にも影響を与えました。アメリカ・メイン州の劇場兼パフォーマンス学校 Celebration Barn の創業者でもあります。

日本人ではマイム・グループ「カンジヤマ・マイム」などがモンタナロ氏に師事していますし、我々ジャグラーに親しみのある人達では、ジャグラー兼マイムのマイケル・メネス Michael Menes、風船男 Inflatable Man、ことフレッド・ガルボ Fred Garbo などが強い影響を受けています。

ジャグリング・ショップ Brian Dube でも著書とビデオを販売しており、名前だけなら知っている人も多いでしょう。

今回は、氏の著書 Mime Spoken Here と同名のビデオ2巻についてご紹介します。

これらの本とビデオは、モンタナロ氏が60代に入ってから出版されたもので、氏の当時で40年以上に渡る実演・指導の経験の集大成とも言えます。

本は、マイムの基礎から応用だけでなく、キャラクター作りや即興のための訓練、作品の作り方まで、ありとあらゆる分野と側面を網羅した教科書です。

The Performer's Portable Workshop という副題の通り、モンタナロ氏がワークショップで教えていた訓練や実習の内容を整理して、とても具体的に説明しています。

また、後述する通り、マイムの技術に加えて内面的な事柄に重点を置いており、訓練や実習を通して教えた考え方や感じ方、気持ちの持ち方などの抽象的な内容を噛み砕いて解説してくれるので、実際にレッスンを受けていない読者でも、レッスンを受けた人が気付いたり感じたりするであろう感覚を想像し、追体験することができます。

2巻組で計4時間弱のビデオは、この本の内容を補うための補助教材として作られています。

実際にはビデオの方が先に出版され本が後発なので、本の内容がビデオの内容を反映し互いに補い合う関係になっており、ぜひ本とビデオを合わせて購入することをお勧めします。

ビデオ第1巻では、マイムのさまざまな技術を数多く取り上げ、手本を実演するとともに、文章による説明や挿絵ではうまく説明できないポイントを1つずつ丁寧に説明していきます。

取り上げられているのは、綱引き、壁、顔の表情、ロープ登り、歩き方、風に逆らう歩き方と吹き飛ばされ方、猿、操り人形、ロボット、階段の昇降、梯子の昇降、立方体と球の表現、手押し車、スーツケース、「滑る、転ぶ、つんのめる」の表現、スローモーションなどで、バントマイムをやる人が必ず学ぶ技術はほとんど取り上げられています。

ただし、大別して3種類ある一般的な歩き方のうち「プレッシャーウォーク」と呼ばれるものは落ちています。これは、「マイムの歩き方」は応用が狭いので自分あまり使わないという講師の考えの反映のようです。

また、ロープや梯子の太さよりも「握っている手の力」の表現に重点を置く点も人によっては異論があるかもしれません。

ある程度マイムについての知識や経験がある人を対象にしているようで、「空間の固定」「アイソレーション」などの基礎技術の前に、いきなり「綱引きの演技」という応用問題から入っているので、まったく知識のない人がこのビデオをだけを見てマイムを学ぼうとするのは順番としてはちょっと勧められません。

マイムのお手本としては、さすがに上手です。

「生」の魅力を剥ぎ取ってしまう狭くて奥行き感のないテレビ画面を通してさえ、マイムの「魔法」は失われず、実際にはそこにはないものがきちんと見えます。

撮影や編集の機材にはお金をかけていないようですが、画質は十分によく、細かい動きや表情もきちんと写っています。

昔のテープから複製した演技の絵がぼけていたり、一部の繋ぎが悪くてノイズ画面が出たりするところも若干ありますが、さほど気にはならないでしょう。

一方、多くの日本人にとっては言葉の問題がありません。解説はすべて英語によって行われ、字幕などは出ません。

講師経験が豊富だけあって、しゃべり方はそれほど早くなく、発音も聞き取りやすく、難しい話し方もしていませんが、とても多くのことを口で説明しているの、英語の聞き取り能力はかなり必要です(おおざっぱに TOEIC 600 点程度?)。

もちろんパントマイムですから、見るだけで分かることも多いのですが、「よくない例」も実演されているので、聞き取れないと誤解してしまう心配があります。

また、重要な概念を示す用語のいくつかは辞書通りの単語の意味から多少はみだしており、正確に理解するためにも本を参照しながら見ることを強くお勧めします。

ビデオ第2巻は、実際の生徒を対象にしたワークショップの様子を抜粋したもので、まず身体の準備運動であるヨガから始めた後、床をいろいろな方法で転がって移動することにより、精神の殻を破り Premise という概念(動きの前提や動機)を理解するための「クロス Cross」と呼ばれる実習を行います。

その後、即興性を高めるためにモンタナロ氏が考案したさまざまな実習や訓練を進めていき、最終的にはグループでの小作品を生徒達が作り上げるところまでを迫ります。

生徒役として前述のマイケル・メネス、フレッド・ガルボの他、いろいろなマイム関係者が出ているのですが、「役」としてではなく実際にワークショップを受けて課題をこなしていく様子は真剣でありながら楽しそうであり、短時間にもかかわらず即興できちんとした小作品を作り上げるところはさすがです。

パントマイムについて、目先の技術だけを手に入れた人にとっては第2巻はほとんど不要でしょうが、モンタナロ氏が本当に教えたかったことを理解するうえで第2巻の方が重要なのかもしれません。

モンタナロ氏の考えによれば、目に見えるパントマイムの技術というものは、身に付けておくべきものでもあっても本質ではないし、極論すれば必須ですらありません。

それを反映して、技術に関する説明はビデオでは第1巻のみですし、本にいたっては3分の1ぐらいしかありません。

逆に強調されているのは、技術に気を取られない、上手にやろうというエゴを捨てる、動きではなくて動きの原因となる動機や前提(Premise)に集中する、姿勢や動作に現れる人格の特徴を理解する、表現するものに心を同調させてそのイメージをもとに動く、即興においては頭で考えずに自然に動いてみて状況と動きを受け入れる、といった内面的なものです。

そしてこれらは説明だけでなく、実習をやることによって身体と心で正しく理解できるもののようです。

私自身は、パントマイムについてはほとんど経験も知識もありません。

パントマイムに関する本はいくつか読んでいましたが、モンタナロ氏の訃報に接して初めて、それまで知ってはいけなくても買うきっかけがなかった著書を読みビデオを見ました。

そして、著書とビデオから伝わってくるのは、長い経験に裏打ちされた技術と明快に整理された理論、パントマイムに対する情熱と誠実な姿勢、驕りや押し付けがましさをない暖かな指導者像でした。

昨年 2002 年の IJA フェスティバルでは、モンタナロ氏の短期ワークショップが併催され、ショーの司会や出演もあったそうです。

以前に著書とビデオを手にとっていれば、万難を排して参加したであろうと思うと、残念でなりません。

書名: Mime Spoken Here

The Performer's Portable Workshop

著者: Tony Montanaro with Karen Hurl Montanaro

出版社: Tilbury House, Publishers

価格: \$15.00

ISBN 0-88448-177-8

ビデオ: Mime Spoken Here Vol.1,2

(Vol.1. 2時間 Vol.2 1時間45分)

\$100.00(2巻セットでの販売のみ)

本とビデオ2巻のセット割引価格 \$105.00

これらの価格は <<http://www.mimetheatre.com/>> で購入した場合です。

支払いには PayPal というサービスを介してクレジットカードを利用できます。

他には Brian Dube <<http://www.dube.com/>> でも購入できます。

なお、英語が苦手だという方には、カンジヤマ・マイムによる以下の2冊が入手可能ですのでお勧めします。

書名:おしゃべりなパントマイム

著者:カンジヤマ・マイム

出版社:大月書店

価格:1,500円

ISBN 4-272-61062-7

寸評:初心者向きだが要点をしっかり押さえた良書。

書名:パントマイムのすべて

著者:クロード・キプニス Claude Kipnis

訳者:カンジヤマ・マイム

出版社:晩成書房

価格:2,800円

ISBN 4-89380-234-8

寸評:経験者向き。マイムの各要素について精緻な考察を加えており、詳しいが難しい。モンタナ口氏も自著の発行以前にはテキストとして使用していたそうです。

[西川正樹 <nishi-m@tkf.att.ne.jp>]



東洋医学から見るジャグリングのすすめ

【第10回】

[東洋医学から見るジャグリングのすすめ(第10回)]

前回到引き続き「遠道刺」「巨刺」という鍼(針)治療の技法を紹介しながら、ジャグリングに役立つ体の仕組みについて考えてみたいと思います。

東洋医学の体系的な医学書では最古(中国・漢の時代)とされている『黄帝内経靈樞』の中に、次のような鍼(針)の技法が記載されています。

・病が上にある時(頭や顔、首・肩・腕など)、遠く離れた下肢(腰や足)に刺す 『遠道刺』

・左側に病があれば右側を、右側に病があれば左側を刺す 『巨刺』

もっと簡単に言うと、痛い所が上なら下に刺し、右なら左に刺す(逆もあり)、つまり「痛い所、病気の所とは反対側を治療しろ」という意味です。

痛くもない所を治療する訳ですから、驚かれる方も多いと思いますが、最近では西洋医学の先生方も体のバランスに注目し、痛みのある関節だけではなく関連する他の関節を治療されたり、病所ではない関節をほぐし、結果的には痛みのある関節を正常に戻すような体操を指導されているのをテレビ等でよく見かけるようになりました。

そうは言っても、一般の方はなぜわざわざ反対側を治療しなければならないのかピンと来ないことでしょう。

武道やダンス等でも、反対側やへそを中心とした対角線上の関節に気を配る練習があります。

では、ボールジャグリングで『遠道刺』『巨刺』(反対側の治療)の重要性と、体にとってバランスの良い練習をするには、どのような意識を持てば良いのか考えてみましょう。

前回、首や肩の歪みについて説明したので、今回は腰の歪みと首・肩の歪みの関係について考えていきます。

ジャグルポイント

図2は前回と同様、ボールジャグリングでボールを右手で右足の下に通す時の姿勢を後ろから見た図です。

ボールを足の下に通す訳ですから、右手は肩ごと深く下げ右足は腰骨ごと上げているのがわかります。

その時に腰骨と胴体の間、CとDの角度が変化している事に注目です。

右足を上げる際にCの角度を狭くすると同時にDの角度を広げて、手を足の下に通しやすくしているのです。

つまり、ボールを右手で右足の下を通すこの動作、一見右手と右足の動きに目を奪われますが、Cの角度を縮める筋力とDの角度を広げる柔軟性が必要です。

このどちらかが出来難いと技もなかなか上手にならない事になります。

また逆に、皆さんが右手で右足の下を通す技の方が得意だからと言ってこの技ばかりをやり続けられれば、AやDの広がらなければならない筋や腱はツツパリを感じ、BやCの縮まなければならない筋や腱は慢性的なコリを感じる事になります。

症状が進み重度になれば、五十肩や腰痛、膝の痛みはもちろん、背骨の歪みがひどくなれば内臓の病気を起こす場合もあります。

特にたいして体に気を配らない一般の方は、毎日の仕事・趣味・日常動作など体の動かし方が決まっているので、負担のかかる体の場所もだいたい決まっている方が多いのです。

ジャグリングの練習後、又、仕事で疲労の溜まった時など、毎回同じ場所が痛くなったりツツパリを感じたりする事はありませんか？

もし皆さんにも、得意な技・苦手な技があるならば、何故たいして練習しても出来ないのにすぐ出来る様になったり、いくら練習しても出来なかつたりするのか、体の仕組の面からも考えられてみてはいかがでしょうか？

特に、使っている体の部分の反対側に意識を配る事は重要です！

次回予告

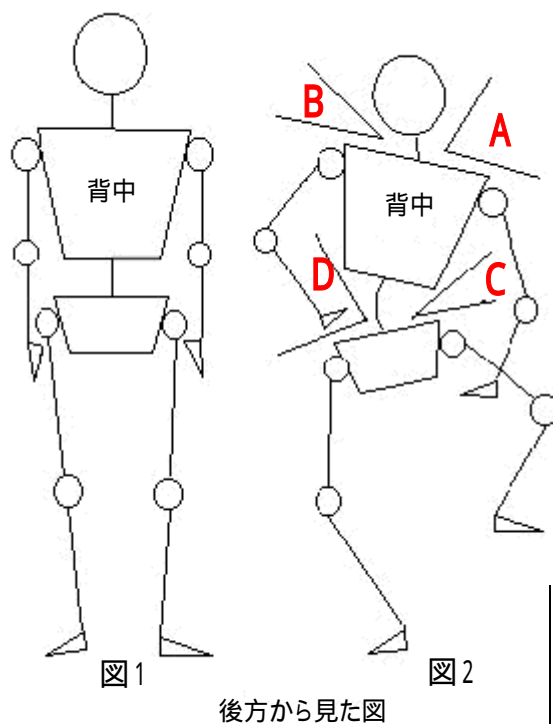
私の治療院では、自分のどの様な日常動作、仕事の姿勢が症状を悪化させているか、患者さん自身にも体の仕組について理解して頂いています。

五十肩や腰痛など一度なると癖になると言われていますが、病気が癖になっているのではなく、自分自身が癖のあるアンバランスな動作を繰り返し行っているのが、一度良くなったように見えても再発するが多いのです。

皆さんがされているジャグリングはバランスを重視するので、体の状態を意識して練習すれば、動作の癖や体の歪みを知るのにとっても役立ちますよ！

次回も、もう少しバランスの話を持ち上げてみようと思います。

[MOMONTA]



早めの編集後記

さぁ春です！今回(1月～3月)もいろいろなアートを楽しみましたが、これからは屋外でフェスティバルも目白押しで、大道芸等が存分に楽しめますね。しかし、楽しみにしているステージショーも幾つかあるのですが、何と云っても一番の楽しみは6月～9月にかけてのユーマの「シャングリラ」！！！！

<<http://www.ktv.co.jp/shangrila2/>>

前回以上の感動が期待できるので、もう今から心臓がバクバクです。

ジャグパルは私という一個人が野次馬根性丸出して、単なる趣味として発行しているものです。従って特定の企業、団体あるいはパフォーマー個人には一切関係しているものではありません。

ジャグパルはWeb上でも見られますので、紙での郵送が不必要な方はご連絡ください。
WebサイトJugPal: <<http://www.chansuke.net/jugpal/>>

編集発行人: 安部保範

E-mail: chansuke@chansuke.net

Webサイト見世物広場: <<http://www.chansuke.net/>>



『ボールジャグリング百科』の翻訳裏

【『ボールジャグリング百科』の翻訳裏話】

- ことの起こり -

「いい本ですね。こんな本が日本で出版されたら、日本でももっとジャグリングが流行るかもね。」

数年前の大みそかの夜、著者のCharlieにあてて書いたメールはこんな内容でした。

これが、その後数年間にわたる難事業の幕開けになるとは.....。

当時、職場の同僚にジャグリングを教わった私は、少しずつ進むのが楽しくて本やビデオを輸入してはあれこれ試していました。

何しろ同僚が教えてくれた技は3つのカスケードとシャワー、それに4つのファウンテンだけだったのです。

そんなとき出会ったのが、

"Charlie Dancey's Encyclopaedia of Ball Juggling"
(邦訳題『ボールジャグリング百科』)です。

単に技の成り立ちを説明するだけの技術書とは違って、ユーモアあふれる語り口や楽しい挿絵、さらに技の理論的解説や人前で見せるときのコツなども盛り込まれ、「一冊の本としての魅力」にあふれていました。

なぜかそのときは(ということは普段はそうでもない)、Charlieからすぐに返事がきて、はじめは軽いファンレターのつもりだったのに、正月休みがあけるころには、プロの翻訳者でもない私がこの本を訳すことになっていました。

- 出版社探し -

引き受けた以上、まずは出版社探しからです。

ライターをやっている知人に「企画書を書け」と教えられ、数ページの企画書を作って、ひたすら出版社に電話攻撃。まあ本業ではないので気楽な部分もありましたが、ずいぶん冷たくあしらわれました。

「はぁ？ ジャグリング？ そんなもの誰が買うんですか」と電話口で説教されたことも一度ならず。関連分野の本を出している数十社にコンタクトしても、企画書をFAXせよと言ってくれるところなどわずが、会って話をきいてくれるところはさらに少なく.....。

そして運命の出会いというか、スポーツ関係の本を扱う出版社に拾ってもらったのです。(といっても一通り翻訳ができた頃に抄訳版での出版を提案され、そのときは気合でウンと言ってもらいました。)

- "Contortionist"をどう訳す？ -

翻訳を進めるうえで悩んだのは、技の呼び名をどうするかということです。

基本的には、英語が得意でない中学生でもひとりで読めるように、なるべく日本語にすることを心がけました(ルーベンシュタインの逆襲、とか)。

それでは格好悪いという人のために、(百科事典の)各項目のタイトルは英語併記になっています。

また、技の名前は韻を踏んでいたりシャレだったりすることが多いのですが、これはほぼお手上げです。

例えばDyer's Straitsという技はDyerさんが発明した技で、ロックバンドDire Straitsのもじりです。そのバンド名は"in dire straits"(苦境におちいって)という英語の慣用句から来ています。

しかもstraitsはボールの軌道が真直ぐ(straight)なことにもかけている。なんてことが伝わるように訳すのは無理というものです。

一方、よく「ごっさんよん」と言われている技が「ファイブ・スリー・フォー」になっていたり、簡単な英語はカタカナにしたところもあります。

ほかに悩ましかったのは、「日本ではその名前は少し違う技をさす」と言われたもの。

原著の誤りであれば著者に確認して直せるのですが.....。

- 原著の誤り -

原著は改版をしていますが、それでも間違いがいろいろありました。

もちろん勝手に直すことはできないので著者に確認するわけですが、メールではなかなか理解してもらえず「その辺りはちょっと難しいから省いてもいいよ」と言われたり。

そんな理由で省くことはできないので(それをやり始めたら本が短くなってしまふ)、食い下がって「はしご図」の画像を送って説明し、やっと「ホントだ、まちがってた」と言われたこともあります。

最後に見つけた間違いは、付録にあるサイトスワップの長大なリストに1093個の技があるとされていたのが、実は1095個だったというものです。さまつなことですが、妙にうれしかった。(笑)

- 英国流ジョーク -

初めて原著を読んだときユーモアあふれる語り口に魅了されたといっても、今思うと、その時点で理解できていたジョークはごく一部でした。

本ができた今でも、わかってないものがいくつもありそうです。

そもそも英国流のジョークには、まじめな顔をしてシレッとナンセンスなことを言う類のものがああります。

英語ネイティブの知人にかなり助けてもらいましたが、なにせ著者自身「イギリスのジョークはアメリカ人にだつてわからない」と豪語しているくらいなので。

さらに、著者の造語による言葉遊び(『鏡の国のアリス』あたりがヒントらしい)や聖書の一節を踏まえた表現など、イギリス人ならニヤリとするようなものも、訳すのは大変(不可能?)でした。

- 印刷用データも作るの? -

この本にはほとんどのページに挿絵や図表が入っています。

著者自身がイラストレーターでもあるので、すべての挿絵を自分で描き、さらにマッキントッシュ上で文章と絵のレイアウトまで自分でしているのです。

日本語版も、著者から送ってもらった印刷用データをもとに、私が印刷用データまで仕上げることになりました。

というのも、原著は1ページに3カラム(段)あって200余りのトピックの各々が整数個のカラムを占めているのですが、そのレイアウトを日本語版でも変えないという方針をとったためです。

逆にいうと、英語版で5カラムの項目が日本語版で6カラムになったりすると、それより後らのトピックの区切りが全部ずれてしまい、ページいっぱい(複数のカラム)にまたがる挿絵が入らなくなったりして困るのです。



結局、訳文の長さや図の大きさを調整することで、原著とまったく同じレイアウトを実現しました。1行減らすために文字と文字の間を微妙に詰めたり、なんてことまでしています。

- 最後に

いろいろ苦勞もありましたが、何とか出版までこぎつけられたのは、Charlieはもちろん、ジャグリングとこの本を愛する人たちの協力があつたからこそです。

特に西川正樹さんと加藤邦道さんには原稿に対して翻訳上または技術上の助言を多くいただき、お陰でかなりよくなったと思います。

最後に本のデータを紹介します。

4月半ば頃には出回る予定なので、どこかで手にとつていただければ幸いです。

書名: ボールジャグリング百科
著者: チャーリー・ダンシー
訳者: 井上恵介
出版元: 遊戯社(ゆうぎしゃ)
本体価格: 3,200円
ISBN: 4-89659-518-1

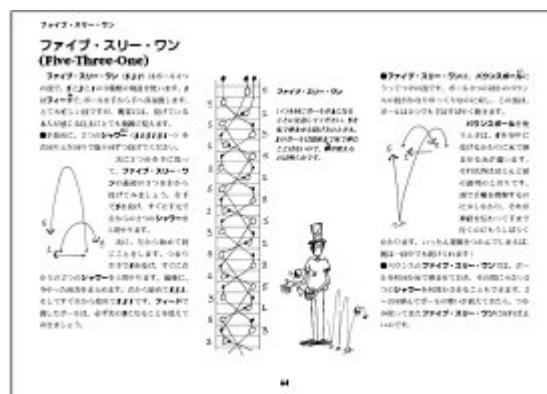
また、この本を紹介するためのウェブサイトを以下のURLで開設しました。

<http://www.dancey.net/jp>

本の内容の見本(PDF形式)やピーター・フランクルさんによる推薦文などがあって盛りだくさんです。ぜひお立ち寄りください。

[井上恵介 <k_inoue@din.or.jp>]

(補足)原著に関しては、西川さんがジャグバル第二号で詳しく紹介されていますのでご覧下さい。





アート見物記

【アート見物記(2月、3月分)】

カバレット・チッタ Vol.2

(2月7日神奈川県川崎市CLUB CITTA'にて)

よくもまあこれだけ多種多様なパフォーマンスを集結させたものだと狂喜乱舞です。

カバレット・チッタは今回で2回目ですが、これって何だか私のために企画して下さっているようで感謝感謝です。

超歌唱、ライブ演奏、曲芸、ダンス、落語、マジック、ジャグリング、映像、コミック芸、マイム、戯れ歌等々……ステージから一時も目が離せません。全くもって次回公演が楽しみです！

公演の詳しい内容と多くの方々の感想は、プロデューサーの大島さんのサイト「デラシネ通信」内の「カバレット・チッタ制作ノート」に掲載されています。

<<http://homepage2.nifty.com/deracine/>>

キグレ New サーカス

(2月9日横浜市みなとみらい121特設会場にて)

20年ぶりの横浜公演とのことで、キグレを観るのは私自身10年ぶり位でしょうか。

観客層はほとんど小さなお子さんを連れた家族連れで、多彩な動物芸は大受けです。

でも動物芸に興味のない私には少々物足りませんでしたが、アーティストの皆さん、心なしか元気がないように見えました。素晴らしい演技を披露しているのだから、もっともっと観客に思い切り笑顔でアピールしても良いのでは。ハラハラドキドキの後のアーティストの笑顔に勝るものはありません。

ストリートパフォーマンス

(2月9日みなとみらい121にて)

ブルーノ・ディスカベスさん、川原章さん、ハンガーマン、三雲いおりさんのパフォーマンスを楽しみました。ブルーノさんの演技は初めて観ましたが、のびのびとした艶やかなバイオリンの音色にウットリとしてしまいました。あやつり人形もジャグラーや空中ブランコなどがあって面白おかしく絶品。

SAM Japan 例会

(2月11日横浜にぎわい座ホールにて)

SAM(The Society of American Magicians) Japan の例会ですが、例会と言っても、プロとアマによるショー、藤山新太郎さんによるレクチャーなど内容は盛りだくさんです。

藤山さんのレクチャーからはテクニカルなことよりも、パフォーマンスの本質の一端を教えていただいたようで、非常に興味深くお話を伺いました。

ちなみに今年8月1日(金)～3日(日)の3日間にかけて、横浜にぎわい座で世界マジックシンポジウムが開催されます。

木下サーカス

(2月14日海浜幕張特設会場にて)

木下は7年ぶり位かな。昨年のポップ、今年のキグレ、木下と、サーカス団が関東圏に立て続けに来てくれたので嬉しくてたまりません。こうやって見比べてみると、それぞれに特徴があり、どれも楽しめます。

キグレ New サーカス (2月15日) 2回目

星屑のヴォワイアージュ

(2月28日スタジオPACにて)

素晴らしいジャグリングを観ました。フランスの国立サーカスセンター(CNAC)から帰国された金井圭介さんのジャグリングです。「魚」のように伸びやかに、しなやかに、そして美しく動き回りながら、クラブジャグリングを見事に融合させています。金井さんの今後の活動からはますます目が離せない。そう確信した公演でした。また「くるくるシルク」の作品も以前観たときよりも磨きがかかって、流れは知ってはいるのですが声を出して笑ってしまうほど面白く仕上がっていました。

キダム

(3月8日原宿・新ビッグトップにて)

演目が似通ったものが多く、サルティンバンコよりは全体的にのっぺりとしていて盛り上がりにくいような印象を受けました。ジャグリングは、エドワード・スクヴィルスキさん(イスラエル)が赤いサッカーボールを5つまで操っていました。

ダメじゃん小出ソロライブ:負け犬の遠吠え Vol.7

(3月11日銀座小劇場にて)

どんどん進化しています、ダメじゃん小出さんの「負け犬の遠吠え」。細かいところまでリサーチしてあって驚きです。その分何を意味しているのか分からないこともあったりして、勉強不足を反省。(冷汗)

おもちゃと遊びのフェスティバル

(3月15日横浜そごう9階新都市ホールにて)

伊藤さんのけん玉は、驚嘆の神業の連続で演技中はまばたきさえできません。

JAMの皆さん(写真)は素人集団ながら年間30～40回イベントをこなしているだけあって、非常にこなれたステージを展開します。いやいや本当に面白かった。

キダム (3月21日) 2回目

[安部保範 <chansuke@chansuke.net>]



左からFleaさん、チャーリーさん、ボランティアの子供3人、MIMOさん